

論文の内容の要旨

論文題名

十二指腸型濾胞性リンパ腫の組織学的形質転換の発生頻度についての長期経過観察

掲載雑誌名

昭和学会雑誌 82 巻 4 号 2022 年掲載予定

医学研究科病理系臨床病理診断学専攻 博士課程 村井 聡

内容要旨

【背景・目的】濾胞性リンパ腫は緩徐な経過を示すが組織学的形質転換 Histological transformation (HT) をきたすと予後不良とされる。十二指腸型濾胞性リンパ腫 Duodenal-type follicular lymphoma (DFL) は一亜型だが HT の発生頻度に関して十分に評価した報告はない。DFL 症例を長期観察と連続的な病理組織診断によって HT の有無を検討した。

【方法】十二指腸・小腸生検により診断された濾胞性リンパ腫症例を抽出し、節性病変の消化管浸潤例を除外するため、Lugano 分類における臨床病期 I 期である 20 症例を対象とした。Hematoxylin-eosin 染色標本と免疫染色標本を用いて HT の発生を評価した。

【結果】診断時の Histological grade は全例で Grade 1-2 だった。臨床的な観察期間は中央値 56 か月 (範囲: 12 か月~147 か月) だった。HT が認められた症例および臨床病期の進行した症例はなかった。

【考察】DFL における HT の発生頻度を検討するうえで、長期の観察を行い HT の有無を組織学的に確認していること、節性病変の消化管浸潤を除外することは高い信頼性があると考えられた。DFL と的確に診断できる場合には HT のリスクは低く、節性の濾胞性リンパ腫に準じた治療を行うことは過剰な治療となる可能性がある。